

日独対照研究
—身体部位名称を含む慣用句を用いて—

加藤 奈美
(欧米第一課程ドイツ語専攻)

キーワード：日独対照、慣用句、身体部位名称、意味派生

0. はじめに

ドイツ語・日本語にはそれぞれ多くの慣用句が存在し、日々日常会話の中で使用されている。そこで今回は身体部位名称を含む慣用句、なかでも「目/Auge」、「手/Hand」、「口/Mund」、「鼻/Nase」、「耳/Ohr」という五官に関わる名詞を含むものに注目し、調査した。慣用句において、比喩的に述べられているものは、語族も文化も違う両言語においてもそれなりの共通点が見られる。そして、それぞれの身体部位名称には辞書上に記述されているもの、更には比喩化して特定の意味が与えられている。

本論文では、日本語とドイツ語においてどの程度それぞれの身体部位名称に与えられている意味に共通点があるのかを調査する。なお、本稿では紙面の都合上、「鼻/Nase」のみを取り上げることとする。

1. 先行研究の概観

卒業論文では、小林(2000)、伊藤(1992)、Itoh(2005)の3つを挙げたがここでは紙面の都合上、本論文に最も関わりを持つItoh(2005)を挙げる。小林(2000)は、スペイン語と日本語において慣用句の対照をしたものであり、伊藤(1992)は、ドイツ語と日本語の慣用句の対照研究を行なっていて、慣用句を構成するレベルによってタイプ分けをし、日独の対応関係を探るものである。そして、Itoh(2005)は、ドイツ語と日本語において身体名詞、および動物の名詞を用いた慣用句表現を網羅的に対照したものである。

1.1. 鼻についての記述 [Itoh(2005) p. p. 143~149 を要約]

1.1.1. 暗喩的意味

(1) 意味、感覚

(1) für etwas eine gute/feine Nase haben¹

<~のための良い鼻を持っている>→「~についてよい感覚を持っている」²

¹例文番号、グロス、および「」内の和文は筆者による。グロスの略称は、巻末を参照。また、例文は全てItoh(2005)による。Itohは独文をドイツの地方新聞各紙より、日文は毎日新聞より用例を収集している。

²<>及び→は、執筆者による。<>内は慣用句の直訳を記し、→より後が慣用句の意味となっている。

Die	Wähler	haben	eine	feine	Nase	dafür ³
Art-M-3Pl-Nom	M-3Pl-Nom	V-3Pl	Art-F-3Sg-Acc	Adj-F-3Sg-Acc	F-3Sg-Acc	Adv
Die	elector	have	a	fine	nose	for it

「有権者はそれに関して、良い感覚を持っている。」

(2) 鼻が利く

(...) 絵本を片端から (...) 読んでいきましょう。そうすると、こういうのが好き、これは楽しめそう、と鼻が利いてくるようになります。

② 金銭

(3) sich eine goldene Nase verdienen <黄金の鼻を稼ぐ> → 「莫大な金を稼ぐ」

Jahrelang	hat	der	Anwalt	sich	sowie	seinem	Staat
Adv	V-Past-3Sg	Art-M-3Sg-Nom	M-3Sg-Nom	Prep	Conj	Art-M-3Sg-Dat	M-3Sg-Dat
For years	have	the	lawyer	himself	and	his	state

mit	dem	Verkauf	von	Humanität	gegen	harte	D-Mark
Prep	Art-M-3Sg-Dat	M-3Sg-Dat	Prep	F-3Sg-Dat	Prep	Adj-F-3Sg-Acc	F-3Sg-Acc
with	the	sale	from	humanity	against	hard	D-Mark

eine	goldene	Nase	verdient.
Art-F-3Sg-Acc	Adj-F-3Sg-Acc	F-3Sg-Acc	V-P.P.
a	golden	nose	earn

「長年の間、弁護士と国は人間性を失ってでも厳しいドイツマルクの中で莫大な金を稼いでいた。」

(4) 鼻薬を嗅がせる

しかし、現実はそのそんなに甘くない。(...) 一時だけ鼻薬を嗅がされたような結果に終わる可能性が高い。

③ 人／頭数

(5) pro Nase 「一人当たり」

Vier	Wochen	Kuba	kosten	alles	inklusive	pro	Nase	1200	Ostmark
Num	F-3Pl-Acc	N-3Sg-Nom	V-Pres-3Pl	Art	Adv	Prep	F-3Sg-Acc		F-3Sg-Acc
four	week	Cuba	cost	all	inclusively	per	nose		Ostmark

「4週間キューバに滞在するのに、全て含めて一人当たり 1200 マルクかかった。」

³ dafür は前置詞 für と事物を表す代名詞結合形

④小さな単位

(6) 鼻の差

スモールも、同じく1位、2位が30万台、3位と4位が20万台、(...)、まさに鼻の差しかない。

表1：鼻／Nase を含む慣用句表現⁴

意味的機能	ドイツ語	日本語
意味／感情	+	+
金銭、	+	+
人、頭数	+	-
小さなこと	-	+

1.1.2. 具象性⁵

「鼻」を用いた慣用句で具体的表現を担う物は以下に分類される。

- ①鼻を高くする
- ②鼻の状態変化
- ③不愉快な状態
- ④鼻を用いた振る舞い

2. 先行研究を踏まえての仮説

先行研究から、「目」、「手」、「口」、「鼻」、「耳」がそれぞれ比喩化されてさまざまな意味を持つことが分かった。しかし、先行研究では日・独それぞれの慣用句の意味が全体数の中でそれほどの割合を占めるのか、また更に詳しく分類は出来ないのかという疑問点がある。そのため、本論文で筆者は先行研究から以下の分類に段階を設けて日独の対照をすることとした。

- ① ドイツ語の慣用句に日本語に対応した慣用句であるか。
- ② 対応した場合、慣用句で用いられているそれぞれの名詞に当てられた意味は何であるか。
- ③ 対応した日本語慣用句がない場合、どのような意味を持っているのか。

ある程度、共通して用いられる諺や言い回しの数があると予想しているが、それぞれの文化や言語の影響によって、日本語・ドイツ語のどちらかにしか出現しない意味があることも期待できる。

⁴表中の+/-は、それぞれの意味的機能を担う表現がある/なしを示す。

⁵伊藤(1992)において、Bildichkeit と言う言葉に対して「具象性」という日本語訳を当てている。Itoh (2005)での Bildhaftigkeit も同様の意味と筆者は判断したため、本稿では一貫して、「具象性」という言葉を用いる。

3. 調査と分析、および考察

今回、調査に用いる資料は

・日本語：日本国語大辞典第二版編集委員会（2001）『日本国語大辞典 第二版』小学館
・ドイツ語：Scholze-Stubenrecht, W. (2002) „Duden Band 11 Redewendungen“ Dudenverlag
の2冊である。Duden Band 11 Redewendungen は、ドイツ語における慣用句を名詞ごとに分類して、辞書化したもので、収録慣用表現数は、10,000 語に上る。

日本語は、「目」、「手」、「口」、「鼻」、「耳」が見出し語として載っている項で慣用句として挙げられているものを、ドイツ語もそれぞれの項に掲載されているものを、それぞれ手作業で抽出し、分析に用いる。日本語は 81 例、ドイツ語 45 例抽出できた。

3.1. 辞書における記述と筆者が設けた基準

はな

☐①哺乳類の吻の先端ないし顔の中心に隆起し、呼吸、嗅覚をつかさどり、発声にも関与する器官。また、ひろく脊椎動物の嗅覚器の存在する部分をいう。一般的には、体の先端部の一部の表皮が陥入してできた腔所(嗅窩)で、嗅覚細胞と嗅覚神経が分布している。

②「はなうた(鼻唄)」の略

③(鼻は一人に一つあるところから)人一人指している語。

④(自分をさし示すとき、自分の鼻をさすところから)自分自身をさしている語・

⑤錠をいう、盗人仲間の隠語。

☐鼻腔の粘膜から分泌する液。はなみず。

[日本国語大辞典第二版編集委員会（2001）第 10 巻 pp.1271 より抜粋、要約]

Nase

1 鼻；鼻ずら

2 (鼻に似た突出部や突端。例えば：)

a) 船首、機種；(自動車の)前部

b) 岩鼻；突出部

[国松孝二編（1988）pp.1607～1608 より抜粋、要約]

以下では、日本語の語義を中心に語義の整理を行う。日本語の語義を中心に、ドイツ語の慣用句を分類する理由としては、日本語を母語とするドイツ語学習者がドイツ語慣用句を理解し、その理解を通して、よりドイツ語の会話力や読解力を高めることに役立てることを、本論文で目標としているためである。

日本語の、「鼻」の原義に基づいて、以下のように意味の派生があったと仮定する。

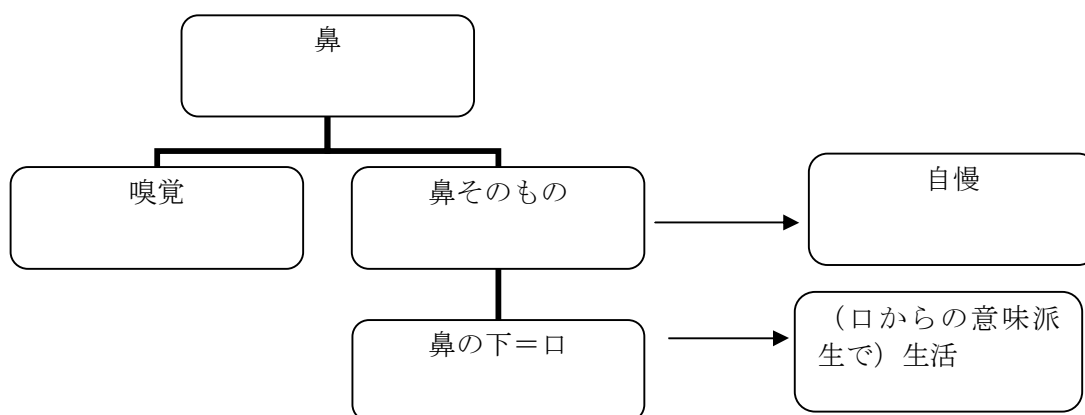


図1:「鼻」の意味派生

3.2. 調査結果、及び考察

以下に、今回の調査結果を記しその後考察を行なった。調査結果では、上記した意味派生を基に日本語、ドイツ語の慣用句を分類し、意味派生から分類し切れなかったものは新たに項目を設置し、その数を記した。

表2:「鼻」に関する調査結果⁶

	日本語	ドイツ語
嗅覚	5 (5%)	0 (0%)
嗅覚→感覚、センス	0 (0%)	3 (7%)
鼻そのもの	26 (30%)	4 (9%)
鼻の下=口	1 (1%)	1 (2%)
口→生活 ⁷	3 (3%)	0 (0%)
口→発言	0 (0%)	2 (4%)
あしらい、軽蔑	11 (12%)	2 (4%)
わずかな差、目の前	4 (4%)	6 (13%)
当て、予想	4 (4%)	0 (0%)
顔、人そのもの、気持ち	8 (9%)	13 (30%)
気持ち→自慢	21 (23%)	1 (2%)
その他	8 (9%)	13 (29%)
計	91 (100%)	45 (100%)

⁶表内での、網掛けをして特記した部分は今回、相違点として顕著な部分として挙げられたということの意味する。

⁷「口」の項では、飲食物の通る器官である「口」から転じて「生活」、また言葉を発する器官であることから転じて「発言」という意味があり、それぞれ「口」の意味派生として日本語・ドイツ語で大きな割合を占めている。

「鼻」では様々な意味派生を持ち、どれか一つに集中して意味を持つわけではないことが、表より見て取れる。また、辞書上での「鼻」の意味の記述には、一切「自慢」に関する記述は見られないにも関わらず、どちらにも「自慢」という意味要素は含まれていて、日本語では特に、23%の割合を占めている。

さらに、「鼻の下」と言う部位から「口」に意味が転換し、「口」の意味派生を「鼻」に含んでいることも興味深い。しかし、「口」の意味派生でも、日本語では「生活」を、ドイツ語では「発言」を示しているという、相違点も挙げられる。

上の表2の結果から見えるように、意味派生において「鼻」に与えられる意味には共通部分も多いが、日本語、ドイツ語それぞれにしか与えられていない意味も見られる。また、共通部分においても、慣用句全体の中で占める割合が違う点から、日本語、ドイツ語の両言語で「鼻」と言う単語から連想される意味に差を捉えることができるため、この調査結果から次のように意味派生を捉えなおすことが出来る。

以下の図では、二重線が日本語・ドイツ共に見られた意味派生、点線が日本語のみ、太線がドイツ語のみを表す。

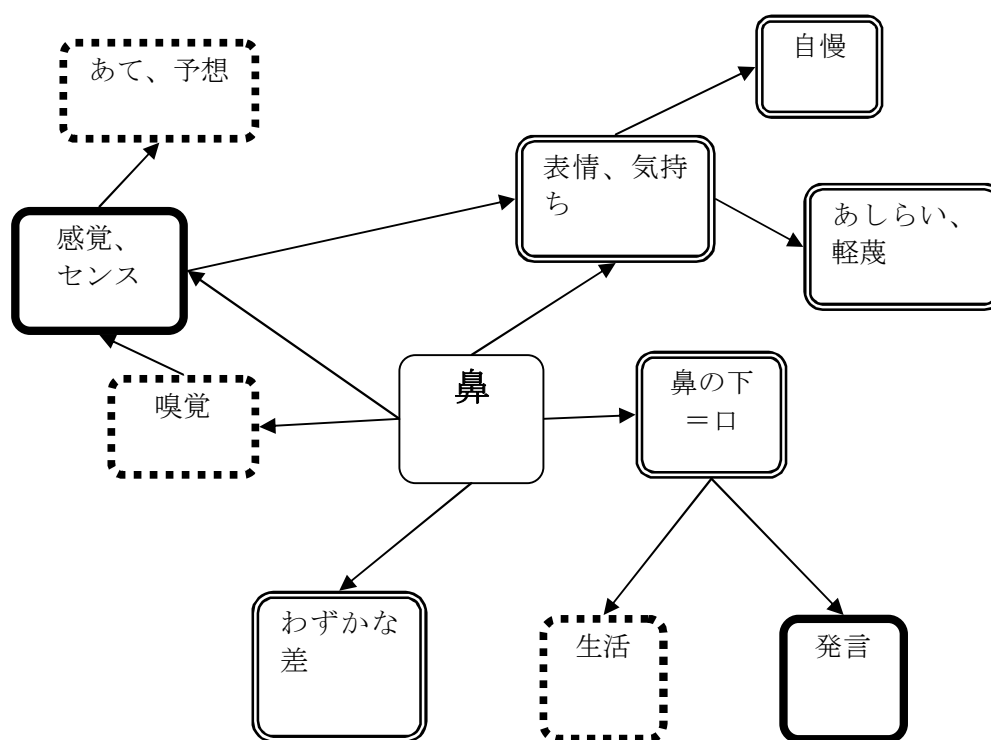


図2：「鼻」の慣用句における意味派生

4. 終わりに

今回の研究によって、日本語とドイツ語の身体名詞を用いた慣用句において、数々の共通点、そして相違点を見出し、分類をすることが出来た。さらに、本論文ではそれぞれの慣用句を慣用句の有無によって分類するだけでなく、全体の数に対する割合を示すことによって、両言語における身体部位名称の派生した意味の使用比率を明示することが出来た。日本語と同じように使われる慣用句も多数存在した。

しかし、分類や分析において不十分な部分もあった。特に、辞書の記述による意味派生を中心としたために、「その他」に分類せざるを得ない慣用句が多い身体部位名称もあった。また、辞書上の意味だけでなく、文化や日本語・ドイツ語、それぞれの言語や文化に由来した意味もあり、分類に偏りが出てしまったのでその点の改善を今後の課題としたい。

略号一覧

1	1 人称	M	男性名詞
2	2 人称	M.V.	ムードを表す助動詞
3	3 人称	N	中性名詞
Acc	対格	Nom	主格
Adj	形容詞	Part.	現在分詞
Adv	副詞	Past	過去形
Art	冠詞	Pl.	複数形
Cop	繫辞	P.P.	過去分詞
Conj	接続詞	Pres	現在形
Conj I	接続法 I 式	Prep	前置詞
Conj II	接続法 II 式	Pron	代名詞・所有代名詞
Dat	与格	Rel	関係代名詞
F	女性名詞	Sg.	単数形
Gen	属格	V	動詞
Inf.	不定形		
Int	疑問詞		

参考文献

- Scholze-Stubenrecht, W. (2002) *Redewendungen*. 2. neu bearbeitete und aktualisierte Auflage. Duden Bd.11. Mannheim. Duden.
- Itoh, Makoto (2005) *Deutsche und japanische Phraseologismen im Vergleich* Julius Gross Verlag, Tübingen
- 伊藤眞 (1992) 「慣用句対照研究 日・独慣用句の対応関係」『言語文化論集』第36号 筑波大学 現代語・言語文化学系 pp.155～169 所収
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂
- 川島淳夫他編 (1994) 『ドイツ言語学辞典』東京：紀伊国屋書店
- 国松孝二編 (1988) 『小学館 独和大辞典「第2版」』東京：小学館
- 小林和世 (2000) 「日西対照研究—身体部位名称を用いた表現を資料として—」西日本言語学会 『ニダバ』第29号 pp.58～67 所収
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2001) 『日本国語大辞典 第二版』東京：小学館
- 橋本郁雄「ドイツ語」(1989) 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第2巻 世界言語編 (中)』東京：三省堂 所収